

Title	<原典翻訳>スーフィズム・アンソロジー・シリーズ7: ガザリー 『宗教諸学の再興』 解題・翻訳ならびに訳 注
Author(s)	東長, 靖
Citation	イスラーム世界研究 : Kyoto Bulletin of Islamic Area Studies (2015), 8: 359-364
Issue Date	2015-03-16
URL	https://doi.org/10.14989/198341
Right	©京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属 イスラーム地域研究センター 2015
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

ガザリー 『宗教諸学の再興』 解題・翻訳ならびに訳注

東長 靖*

1. 解題

1) 古典的理論書の形成

本シリーズ第2回の解題で述べたとおり、10世紀半ばから12世紀半ばまで、スーフィズムの古典的理論書と列伝が相次いで書かれた。今回は、理論書の集大成ともいえるガザリーの『宗教諸学の再興』を取り上げる。原著は、一連の古典的理論書の掉尾を飾る著作として有名である¹⁾。スーフィズム研究者ウィリアム・チティックは、法学・神学が作り上げてきた学問体系、すなわち「宗教諸学」(‘ulūm al-dīn)を、それに「息を吹き込むこと」(ihyā’)によって再活性化させることがガザリーの意図であったという [Chittick 2000: 21]。

現在の通説では、ニザーミーヤ学院長を務め、スンナ派ウラマーの頂点にいたガザリーの回心とそのスーフィズムへの傾倒および理論化によって、スーフィズムはスンナ派思想のなかに最終的に確固たる地位を占めることになったとされている。これをもって筆者は、古典的スーフィズムの完成と呼んでいる。法学を中心とするザーヒルの学問と、スーフィズム(および神学)を中心とするパーティンの学問が相互補完的にイスラーム思想(ここではとくにスンナ派思想)を支える体制ができあがったのである。

2) ガザリーの生涯と著作について

アラブ世界のイスラーム著述家の列伝として知られるウマル・リダー・カッハーラ(d. 1408/1987)の『著述家辞典』(Mu‘jam al-mu‘allifīn)のなかの「ムハンマド・ガザリー」の項目には、彼の生涯について次のような簡単な説明が与えられている。

15766番：ムハンマド・ガザリー(450-505A.H./1058-1111A.D.)

ムハンマド・イブン・ムハンマド・イブン・ムハンマド・イブン・アフマド・トゥーサー・シャーフィイー。ガザリー(またザイヌッディーン、フジヤ・アル=イスラーム [イスラームの証]、アブー・ハーミド)として知られる。

知識人²⁾・神学者・法学者・法源学者(uṣūlī)・スーフイー。諸学を兼学する。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授

1) スーフィズム史をまとめたジュリアン・バルディックは、彼の思想上の評価は過大であり、実際には彼の弟のアフマド・ガザリーの方がその思想的影響力は大きかったとする説を唱えている [Baldick 1989: 67]。アブー・ハーミドが言ってみれば過去の遺物の集大成をしたのに対して、アフマドこそが新しい潮流を起こし、後代を切り拓いたと評価し、より思想的に重要だとする説である。しかし、同時代以降、現代に至るまで、常に参照される著作としてアブー・ハーミドのものが挙げられるのに対して、アフマドの著作の影響はペルシアなど東方世界に限られていることを考えれば、イスラーム世界全体への影響力はやはり兄の方が勝るといふべきであろう。

2) 原語はḥakīm。生涯についてきわめて類似した説明を載せるズィリクリー (Khayr al-Dīn al-Ziriklī, d. 1396/1976)の『著名人伝』(al-A‘lām)では、この個所を「哲学者」(faysalūf)と説明しているの、そう訳すことも可能かもしれない。ただし、ガザリーの意図そのものからいえば、彼が哲学者でないことは明白である [Ziriklī 1986: 222]。

ホラーサーンのトゥースの2つの村のひとつターバラーン (Tābarān)³⁾ に生まれ、糧を得るために法学を学ぶ。その後、ジュルジャーンのアブー・ナスル・イスマーイーリーの許に移り、それからニーサーブール (ニーシャープール) [在住] の二聖都の師アブー・マアラー・ジュワイニーの許に [移って]、彼の許で学び、つき従った。それからクルアーン読誦学教授のために講壇を開き、[宰相] ニザームルムルクのサロンに伺候した。ニザームルムルクが彼に関心をもったため、ガザリーの地位は高くなった。バグダードのニザーミーヤ [学院] での教授に指名された後、信仰と旅に専心した。

それゆえ、ヒジャーズに出奔し、ハッジを行った。ダマスカスに戻り、そこに10年住みついた。それからエルサレムとイスカンダリーヤへと旅し、それからトゥースの故郷に戻った。それから宰相ファフルッディーン・イブン・ニザームルムルクが彼をニーサーブールのニザーミーヤ [学院] に招聘し、彼はそれに同意した。それから故郷に戻り、近所にスーフィーたちのためのハーンカーと学生たちのためのマドラサを建て、隔離 [の生活] を貫き、ターバラーンにて没した⁴⁾。[Kahhāla 1993: 671]

ガザリーは、日本では最もよく研究の進んでいるスーフィーと言ってよいであろう。生涯と著作についても、それらの先人たちの研究ですでに考究されているので、本稿ではそれらを紹介するにとどめたい。

彼の生涯を語る際にまず典拠とされるのが、彼自身の書き遺した『誤りから救うもの』もしくは『誤りからの救い』(*Munqidh min al-dalāl*) である。本書の初めての全訳は、[藤本 (訳) 1974] である。後に詳細な解説をつけた翻訳 [中村 (訳) 2003] が出版され、同翻訳は [中村 (訳註) 2013] に再録されている。ただし、貴重な解説の多くが2013年版では割愛されているので、2003年版はいまだ貴重である。また、[黒田 (訳・解説) 1985] も『哲学者の意図』の解説において、彼の生涯を思想面を中心に整理している。近年では、[青柳 2014] がこの偉大な思想家の生涯を、限られた紙数の中で魅力的にまとめている。

ガザリーの思想についての日本語の単著としては、[中村 1982; 2002; 青柳 2005] がある。

ガザリーは生涯に数百点の著作を遺しており、諸学を修めた人だけに、多岐にわたる分野に関する著作がある。たとえば、まったく網羅的な目録ではないものの [Griffel 2009: 361-367] の分類に従って彼の著作を挙げると、1. 哲学・文献学・倫理学関連 71 点 (神学やスーフィズムの著作はここに入れられている)、2. 法学 (ファトワーを含む) 関連 24 点、3. 政治学・為政者への忠告関連 6 点、4. 教育関連 1 点、5. 自伝的著作 4 点のようになる。著作一覧としては、いささか古い [Bouyges 1959; Badawī 1961]⁵⁾ がある。また、<<http://www.ghazali.org/site/bibliography.htm>> はガザリーのビブリオグラフィーに関する研究サイトであり、上記2著以外のものも紹介されている⁶⁾。ガザリーの著作の内、邦訳されているものとしては、上述の [藤本 (訳) 1974; 黒田 (訳・

3) Yāqūt の *Mu'jam al-buldān* によれば、「(ターバラーンは) トゥースの2つの町のひとつである。なぜなら、トゥースというのは、大きい方がターバラーン、いま一つがヌーカーン (Nūqān) という2つの町の謂いだからである。」 [Yāqūt n.d.: 3]

4) なお、原文ではこの後に、主な著作名が列挙されている。

5) バダウィーの目録については、今世紀に入ってから補遺が出されており、ウェブサイトで見ることができ (<<http://www.ghazali.org/biblio/AuthenticityofGhazaliWorks-AR.htm>>, “Kutub al-imām al-Ghazālī al-thābit min hā wa al-manhūl,” Mashhad Al-Allaf’s Ghazali’s works (in Arabic). Addendum to Badawi’s work above, 2002)。

6) 著作目録やサイトについては、青柳かおる新潟大学人文学部准教授にご教示頂いた情報によるところが大きい。お礼申し上げます。

解説) 1985; 中村 (訳) 2003; 中村 (訳註) 2013] のほかに、[中村 (訳) 2000a; 2000b] が挙げられる。

なお、ガザリーの用いる術語については、[Rafiq al-'Ajam 2000] が参考になる。

3) 『宗教諸学の再興』について

10-12 世紀に書かれたスーフィズムの古典マニュアルの例にもれず、本書もスーフィズムと法学・神学の整合性を示すことを主たる目的としている。本書はさらに進んで、単に整合的なだけでなく、スーフィズムこそが諸学の究極であると主張する。そのことは、本翻訳の末尾に示される本書の構成からみてとることができる。すなわち、4 部からなる本書は、1. 信仰行為 ('ibādāt)、2. 慣習 [的行為] ('ādāt)、3. [人々を] 危険 (muhlikāt) [に導く悪行]、4. [人々を] 成功 (munjiyāt) [に導く善行] という風に構成されている。法学や神学と関わりの深い議論を展開した後、最後にスーフィズムの徳を述べるという形で作られているのである。

ガザリーは分かりやすい達意の文章を書くので有名な人であるが、主著である本書の劈頭を飾る部分だけに、この冒頭部は文章の技巧がこらされている。

【解題への参考文献】

Badawī, 'Abd al-Rahmān. 1977. *Mu'allafāt al-Ghazālī*, al-Qāhira, 1961; 2nd ed., al-Kuwayt: Wikāla al-maṭbū'āt.

Baldick, J. 1989. *Mystical Islam: An Introduction to Sufism*, London: I. B. Tauris.

Bouyges, Maurice. 1959. *Essai de chronologie des œuvres de Al-Ghazali (Algazel)*, édité et mis à jour par Michel Allard, Beyrouth: Imprimerie Catholique.

Chittick, William C. 2000. *Sufism: A Short Introduction*, Oxford and Boston: Oneworld Publications.

Griffel, Frank. 2009. *al-Ghazālī's Philosophical Theology*, Oxford & New York: Oxford University Press.

Kaḥḥāla, 'Umar Riḍā. 1993. *Mu'jam al-mu'allifīn: Tarājim muṣannifī al-kutub al-'Arabī*, vol. 3, Bayrūt: Mu'assasa al-Risāla.

Rafiq al-'Ajam. 2000. *Mawsū'a muṣṭalahāt al-Imām al-Ghazālī*, (Silsila Mawsū'āt Muṣṭalahāt A'lām al-Fikr al-'Arabī wa al-Islāmī 4), Bayrūt: Maktaba Lubnān.

Yāqūt b. 'Abd Allāh. n.d. *Mu'jam al-buldān*, vol. 4, Bayrūt: Dār Ṣādir.

Ziriklī, Kayr al-Dīn al-. 1986. *al-A'lām: Qāmūs Tarājim li-ashhar al-Rijāl wa al-Nisā' min al-'Arab wa al-Musta'ribīn wa al-Mustashriqīn*, vol. 7, Bayrūt: Dār al-'Ilm li-l-Malā'īn.

青柳かおる 2005 『イスラームの世界観——ガザリーとラーズィー』 明石書店。

—— 2014 『ガザリー——古典スンナ派思想の完成者』 (世界史リブレット 人) 山川出版社。

黒田壽郎 (訳・解説) 1985 ガザリー著 『哲学者の意図——イスラーム哲学の基礎概念』 (岩波古典叢書) 岩波書店。

東長靖 1995 「ガザリー——苦悩するエリート」 佐藤次高 (編) 『人物世界史 4 東洋編』 山川出版社、136-139 頁。

中村廣治郎 1982 『ガザリーの祈禱論——イスラーム神秘主義における修行』 大明堂。

—— (訳) 2000a ガザリー著 「イスラーム神学綱要」 上智大学中世思想研究所編訳・監修 『イスラーム哲学』 (中世思想原典集成 11) 平凡社、407-594 頁。

—— (訳) 2000b ガザリー著 「光の壁龕」 上智大学中世思想研究所編訳・監修 『イスラーム哲学』 (中世思想原典集成 11) 平凡社、595-663 頁。

- 2002 『イスラームの宗教思想——ガザリーとその周辺』 岩波書店。
- (訳) 2003 『誤りから救うもの——中世イスラーム知識人の自伝 / ガザリー著』 筑摩書房 (ちくま学芸文庫)。(再刊: 下記『中庸の神学』平凡社(東洋文庫)所収。)
- (訳註) 2013 『中庸の神学——中世イスラームの神学・哲学・神秘主義 / ガザリー著』 平凡社(東洋文庫)。
- 藤本勝次(訳) 1974 ガザリー著「誤りからの救い」『インド アラビア ペルシア集』(筑摩世界文学大系9) 筑摩書房、251-283頁。

2. 翻訳ならびに訳注

訳出にあたっては、Abū Ḥāmid al-Ghazālī, *Iḥyā' 'ulūm al-dīn*, Abū Ḥafṣ Sayyid b. Ibrāhīm b. Ṣādiq 'Imrān (ed.), vol. 1, al-Qāhira: Dār al-Ḥadīth, 1998, pp. 9-12 を底本として使用した⁷⁾。

この『宗教諸学の再興』は、2013年度の京都大学におけるアラビア語・スーフィズム文献講読で取り上げたものであり、同講読には下記の学生諸君が参加した(敬称略、所属は当時)。田中悠子、西山瑞穂(以上文学研究科)、池端路子、石野達也、内山隆彦、大津谷馨(以上文学部)、山本直輝(アジア・アフリカ地域研究研究科)。これら学生諸君から貴重な意見・示唆を与えられることが少なくなかった。

凡例

下記の略語を用いる。

【讚】：彼に讚えあれ。Subḥāna-hu.

【祝福】：アッラーが彼に祝福を垂れ、平安を与え賜いますように。Ṣallā Allāh 'alay-hi wa sallama.

【恩寵】：彼にアッラーの恩寵と平安のあらんことを。Ṣalawāt Allāh 'alay-hi wa salāmu-hu.

翻訳

/9/ 慈悲深く慈愛遍きアッラーの御名において。

私は第一に、絶え間ない多くの賞賛をもって、アッラーを讚える。それはたとえ、賞賛者の賞賛が、[アッラー]の正しき尊厳なしには少ないものであるとしても、である⁸⁾。

そして私は第二に、人間の師[であるムハンマド]とともに、遣わされた方々のすべてを救い尽くす祈りをもって、[アッラー]の諸使徒のために祈り、平安をこい願う。

そして私は第三に、宗教諸学の再興に関する書籍の執筆への私の強固な意志がそれに向かってわきおこってくるところのもの[すなわち本書の執筆]において至高なる[アッラー]の正しき導きを乞う。

そして私は第四に、おお一群の否定者たち(jāhidīn)のなかの批判において過激な批判者よ、また、多くの世代にわたる不注意な否定者たちのなかの非難と否定において過激な者よ、汝の不審を断ち切ろうと思う⁹⁾。すでに[アッラーは]私の舌から沈黙の結び目をほどかれ、私の首に論理の首飾りと言葉のネックレスをおかけになった。汝が固執していること、すなわち真理の明白な

7) ほかに、マクタバ・ミスル版(al-Qāhira: Maktaba Miṣr, 1998)、ダール・アル＝ハイル版(Bayrūt: Dār al-Khayr, 1997, vol. 1, pp. 7-9)をも参照した。

8) 人間の側の賞賛はそれ自体としては取るに足りないものである。神の尊厳をもって初めてそれは大いなるものとなる。

9) 受動態で読んで、「……断ち切ることを私は[神によって]命じられている」と訳すこともできるか。

事実に目を閉ざすことは、無益なものを助け、無知を称賛する¹⁰⁾ ことへの固執と、人々の〔悪しき〕習わし (*marāsīm al-khalq*) を放棄することの方をある程度好み、形にこだわることよりは、知の要請に基づく行為の方にいくらか傾くような者を不安にさせる (*tashghīb*) ことを伴っている¹¹⁾。/10/ [こういった善良な人々は] 汝がそれでもって彼、すなわち至高なるアッラーを拜むところのもの——すなわち魂の浄化と心の矯正の獲得——を望んでおり¹²⁾、困惑の中で汝に必要なことを完全 [に得ること] には絶望しているにせよ、これまでしてきた人生の浪費のいくらかを正し、聖法の担い手 [であるムハンマド] 【恩寵】が彼らについて、「復活の日に、最も激しく罰される者は、アッラー 【讚】が自らの知で彼をお助けにならないような学者 (*‘ālim*) である」¹³⁾ とおっしゃったような人々の危険から身を遠ざけるのである。

誓って (*la-‘amrī*¹⁴⁾) まことに、汝が [このような無知な状態であり、他人をも無知に巻き込んでしまう] 高慢をし続ける原因はただ、多くの人々に広く共通であるのみならず、万人のあいだに [くまなく] 広まっている病なのである。[その病とは、具体的にいえば] この問題の最も重要な点 (*dhirwa*¹⁵⁾) への [細心の] 注意の欠如であり、また [以下のことへの] 無知である。[すなわち、汝の今置かれている状況という] 事柄は恐ろしいものであり、事態は深刻で、[罰を受ける] 来世は近づきつつあり、現世は [足早に] 逃げ去りつつあり、定めの際は間近で、[救いに至る] 旅 [の道のり] は遠く、[汝を楽園へと導いてくれる、生前の善行である] 蓄えは少なく、[来世で火獄に入れられる] 危険は大きく、[救いへの] 道は閉ざされている [、ということである]。アッラーのお顔に属する以外の知識や行為は、洞察力にすぐれた批判者のもとでは否定 [されるべきもの] であり、来世への道の旅は案内人も同行者もなく多くの悲惨を伴って困難で疲労多きものである。

さて、[この来世の道の] 案内人とは、預言者の後継者たるウラマーである。そして、時間が彼らから逃げ去り、残るのはただ盲従者のみである。すでに、彼らの大多数を悪魔が圧倒し、不信仰 (*tughyān*) が彼らを迷わせた。そして誰もが、現世の快樂 (*hazz*) を盲愛するようになった。そして、善を悪と、また悪を善と見なすようになり、ついには [正しい] 宗教 [イスラーム] の学が消滅し、地の諸方にある導きの灯は消えてしまった。彼ら [悪しきウラマー] は人々に、知とは [次の3つのいずれかに] ほかならないと信じさせたのである。それは [第1に] 裁判官たちが一般民衆の混乱における訴訟に判決を下す際に頼りにする判決の (*ḥukūma*) ファトワーか、あるいは [第2に] 相手を打ち負かし、沈黙させることに向けて競争する学者 (*tālib*) がそれでもって武装する論争か、/11/ あるいは [第3に] 説教師が民衆の説得に至ろうとする時に用いる飾り立てられたサジュウ [韻を伴った散文] かである。こうして、これら3つ以外を禁忌 (*ḥarām*) に至る畏、屑 [を集める] 網として、[知と] 見なさなかつたのである。

さて、来世の道の知および正しい父祖たち (*salaf*) が辿った [道]——すなわちアッラー 【讚】 がそ

10) 無知をよしとする。

11) スーフイズムの真理を知らないウラマーたちに対して、真理に気づかないいるために、無益なことをなし、あまつさえ善良な他人をも不安にさせている、と批判しているのである。

12) 以降の文は、「人々の〔悪しき〕習わし (*marāsīm al-khalq*) を放棄することの方をある程度好み、形にこだわることよりは、知の要請に基づく行為の方にいくらか傾くような者」に関する説明と見る。文中に「汝」という語が見えるが、これを、これまで「汝」で示されてきた、指弾すべき形だけのウラマーたちとすると、文意が通らないからである。

13) ハディース。タバラーニー (*Abū al-Qāsim Musnīn al-Dunyā Sulaymān ibn Ahmad al-Ṭabarānī*, d. 360/971) のハディース集成 *al-Mu‘jam al-saghīr* (『小集成』。彼にはほかに、『大集成』『中集成』もある) およびバイハキー (*Ahmad b. al-Husayn al-Bayhaqī*, d. 458/1066) の *Shu‘ab al-īmān* (『信仰の諸分野』) にあるハディースで、アブー・フライラを第一伝承者とする。校訂者アブー・ハフスは、イスナードがきわめて薄弱 (*da‘īf*) なハディースとしている。

14) 文字どおりには「私の命にかけて」。

15) 文字どおりには「頂点」。

の書[クルアーン]のなかで、知(fiqh)、叡智(hikma)、知識('ilm)、閃光(ḍiyā)、光(nūr)、導き(hidāya)、正しい道(rushd)と呼ばれたもの——について言えば、[昨今の]人々の間では、隠れたもの(matwī)になり、完全に忘れ去られてしまったのである。

これが、気も滅入るような(mudlahimm)災難(mulimm)・災害(khaṭb)として、宗教[イスラーム]のなかの亀裂¹⁶⁾[となっている状態]なので、私は本書の執筆に従事することを、宗教[イスラーム]諸学を再興すること(ihyā')、先達である師たちの[辿った]道を明らかにすること(kashf)、諸使徒と正しい父祖たちのもっていた有益な知の栄光(mubāhī)を示すこと(iḍāh)において、重要だと見なしたのである。

そして私はすでに、それ[本書]を4部に基づいて構成しておいた。それは、信仰行為('ibādāt)の[第1]部、[人々の日常生活における]慣習[的行為]('ādāt)の[第2]部、[人々を]危険(muhlikāt)[に導く悪行]の[第3]部、[人々を]成功(munjiyāt)[に導く善行]の[第4]部である。

私は[本書の]全体を「知の章(kitāb al-'ilm)」で始めた。なぜなら、それは[以下のことのために]極めて重要だからである。[それは]人々が、彼[アッラー]の使徒【祝福】の言葉に基づいて、それを求めることでアッラーへの奉仕に専心するような知をまず明らかにする[、ということである]。なぜなら[ムハンマド]【祝福】は「知の探求はあらゆるムスリムにとっての義務である」とおっしゃったからである。その[知の章]のなかで、私は有益な知を有害な[知]と区別した。なぜなら[ムハンマド]【祝福】は「有益でない力の救いを私たちはアッラーに求めまつる」とおっしゃったからである。そして、当代の人々が、知性[に従った]やり方を嫌い、幻の瞬きに欺かれ、知識に関して、[真理である]核を離れた殻[のような瑣末なこと]に満足していることをはっきりさせた。

信仰行為の[第1]部は[次の]10章を含む。[すなわち]知の章、信仰の原則の章、清めの極意(sirr)の章、礼拝の極意の章、定め喜捨の極意の章、齋戒の極意の章、巡礼の極意の章、クルアーン読誦の作法の章、ズィクルと祈り(da'awāt)の章、定時のウィルドの整序の章である。

慣習[的行為]の[第2]部については、[次の]10章を含む。[すなわち]食事の作法の章、結婚の作法の章、[利益]獲得[の商売]のやり方の章、合法(halāl)と違法(harām)の章、さまざまな職種の人々との会話と交際の作法の章、隠遁の章、旅の作法の章、サマールと合一の境地(wajd)の章、善を命じ悪を禁じることの章、生活の作法と預言者性の性質の章である。

/12/ 危険[に導く悪行]の[第3]部については、[次の]10章を含む。[すなわち]心の不可思議の説明の章、魂の鍛錬(riyāda)の章、ふたつの欲望——子宮(baṭn)の欲望と外陰部(farj)の欲望¹⁷⁾——の害の章、舌(lisān)の害の章、怒り(ghaḍab)と悪意(hiqd)と嫉妬(ḥasad)の害の章、現世の非難(dhamm)の章、財産(māl)と強欲(bukhl)の非難の章、高位(jāh)と偽善(riyā')の害の章、高慢(kibr)と虚栄('ujb)の害の章、欺瞞(ghurūr)の害の章である。

[人々を]成功(munjiyāt)[に導く善行]の[第4]部については、[次の]10章を含む。改悛(tawba)の章、忍耐(ṣabr)と感謝(shukr)の章、畏怖(khawf)と希望(rajā')の章、清貧(faqr)と禁欲(zuhd)の章、[神の]唯一性(tawḥīd)と[神への]絶対的帰依(tawakkul)の章、愛(mahabba)と熱望(shawq)と慈愛(uns)と満足(riḍā')の章、意図(nīya)と誠実(ṣidq)と誠真(ikhlaṣ)の章、精神統一(murāqaba)と省察(muḥāsaba)の章、瞑想(tafakkur)の章、死の想起(dhikr al-mawt)の章である。

16) 真理を求める人々と、軽佻浮薄なウラマーおよび彼らに踊らされる大衆との間の亀裂を言う。ガザーリーは前者の立場にたって、後者(とくにウラマー)を論難している。

17) 性欲を指している。